

# 短期海外スポーツ研修の効果

～学生の海外に対する不安・抵抗感に着目して～

スポーツマーケティングゼミナール 1315028 佐藤 陸

## 1. 研究動機・研究目的

近年、世界は、グローバル化が進んでおり、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神などを身に付けているグローバル人材の育成がこれから重要になっていくと考えられる。しかし、日本国内における7割の企業が海外事業に必要な人材が不足していると感じており、グローバル人材に見合った人材が日本国内の半数以上の企業で不足している（総務省、2017）。教育再生実行委員会の提言を受け2014年から「スーパーグローバル大学創成支援事業」が始まったが、刈谷（2017）は、大学のグローバルランキングを高めるために英語での授業や外国人教員を増やすことは、大学生の語学力向上や国際力の向上に対して効果が薄いと述べている。つまり、現在大学で行われている施策はグローバル人材に見合う人材を育成するには効果が薄いということが懸念される。

一方で、短期海外研修に関しては一定の効果があることが示されており、鈴木（2014）によると、短期海外研修プログラムが学生の言語的・情意的側面の肯定的な影響を及ぼしていることから、特に、情意面での肯定的な変化が顕著であることを示されている。また、田浦（2009）は、現地の人との生活が学生の異文化社会で生きていけるという自信につながっていることを示している。

このように、短期海外研修は学生の情意面において、肯定的な変化をもたらす要因となっていることは明らかである。しかし、大学の短期海外研修に関する研究は多く見られるが、短期海外スポーツ研修に着目した研究は見当たらない。そこで、本研究は、短期海外スポーツ研修において、学生が外国人とのコミュニケーションや海外に抱く不安・抵抗感に着目し、短期海外スポーツ研修の効果について明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

調査対象は、A大学で行われたマウイマラソン研修に参加した学生（5名）とした。本研究は2016年9月15日～19日（4泊6日）に、米国ハワイ州マウイ島にて実施された研修である。参加した学生は大会運営ボランティアとして、給水所での水の配布やインフォメーションセンターでの対応を現地のボランティアと一緒に行った。また、調査方法はインタビュー調査を実施した。被験者の許可を得たうえで、半構造化面接を行い、録音した。録音したデータは個人が特定されないようにテキスト化した。学生の海外に対する不安や抵抗感を軽減したエピソードや学生自身が研修を通して変化したことについてのエピソードを「修正版グランデッド・セオリー・アプローチ」を参考に概念を生成し、カテゴリーに分け、分析した。

## 3. 主な結果と考察

分析の結果、カテゴリー同士の関連性を検討し、結果図（図1）を作成した。その結果、短期海外スポーツ研修に初めて参加した学生は、研修当初は英語での会話に対して不安を抱いていたが、会話を重ね、ジェスチャーを用いたり自分の知っている単語で会話したりすることで外国人との会話が成立し、そのことが学生の自信となり、不安や抵抗感の減少に繋

がったと推察された。また、マウイマラソン研修に参加する以前に短期海外研修に参加経験がある学生は、マウイマラソン研修への参加以前から海外渡航や英語での会話に抵抗がなく、研修参加動機も海外をもっと知りたい、外国人ともっと関わりたいといった理由が多かった。こういった学生からは、研修を契機として海外への興味を深めている様子が見受けられた。しかし、学生の中には外国人しかいない環境に馴染むことができず、日本人が一人しかいないという孤独感や外国語で会話することに対する拒絶傾向を示す学生もいた。

本研修で、学生は外国人とのコミュニケーションにおける意識の変化を感じたとともに、海外に対する意識の変化もあった。また、自身の英語力の現状を把握することができた。従って、海外スポーツ研修は、学生のコミュニケーションと海外に対する意識の変化もたらすことと、学生自身の語学力の現状を把握する上で一定の効果があると考えられる。

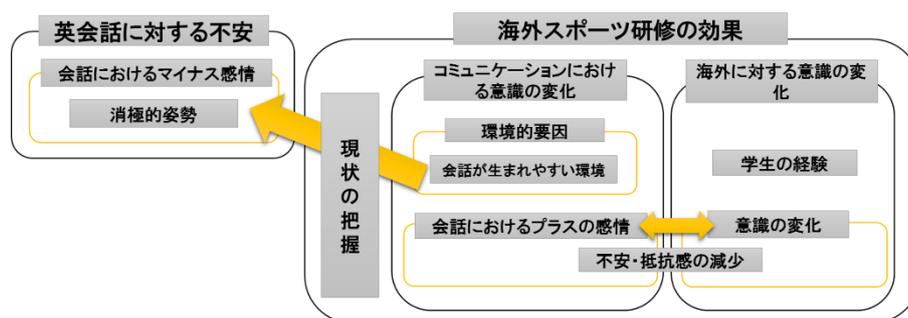


図 1. 結果図

#### 4. 結論

短期海外スポーツ研修には一定の効果があったが、研修参加後に一定期間、海外に行く機会がなく、英語での会話や海外という環境に触れなかった学生は、再び海外に対する抵抗感や不安を抱いており、研修効果の薄れがみられた。このことから、今後、研修に参加した学生に対し、空港での通訳ボランティアや国際スポーツイベントでのイベントスタッフといった英語での会話の機会や外国人と関わる機会を設けるなどして、研修効果を継続させることが今後の課題であると考えられる。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

大学 4 年間の集大成である卒業論文の執筆を終えることができ、自分自身も成長を感じることができました。担当教員である工藤先生をはじめ、大学院生の方々の指導、協力により研究を行うことができました。そして、互いに励ましあいながら時を過ごした同期の皆さん、本当にありがとうございました。

#### 主な引用参考文献

- (1) 刈谷剛彦 (2017) 「オックスフォードからの警鐘 グローバル化時代の大学論」中公新書ラクレ、p. 38、p. 53
- (2) 田浦秀幸、堀井耕太郎、馬西卓徳、岡田宏子、清水大介、柏本恵未、戸成辰也 (2009) 「ニュージーランド短気英語研修の効果に関する一考察」言語文化学研究、言語情報編、2009、4、p. 1-22